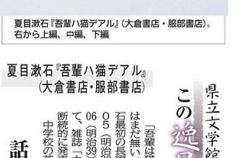

山日文藝

題字　宮川　翠香

（◎秀作　○佳作）

俳句

井上 康明選

◎大年や残照を水尾ひと筋に　甲府　夢見　一郎
○冬ぬくし眉毛の垂るる翁面　甲府　中村　彰
○風のこゑ日輪のこゑ山眠る　笛吹　小沢　勝
○木枯の道拓けたる信濃口　北杜　金子　至
綿虫や轍に傾ぐ猫車　都留　高部志づの
夫と子の話に入らず毛糸編む　富士吉田　前田せき子
新しき法被の杜氏寒造　甲府　渡辺　優
秋渇き患者溢るる外科医院　甲府　太田　道夫
今生の足より老ゆるきりぎりす　富士川　丸山　一雄
葡萄苗抱へ師走の街にあり　山梨　丸山　敏章
満天星紅葉ま青なる空一枚　甲斐　諏訪　英隆
初雪の丘に佇む妻の墓　北杜　細川富士夫
向き合ひし阿吽狛犬木の葉雨　甲府　白倉　京子
包丁と野菜と庫裏の寒さかな　都留　磯村　璋一
送るとは残さるること冬白菊　富士吉田　渡辺のり子
葉も茎も折れ曲りゐる枯はちす　北杜　小松　俊隆
切り株の年輪冬日惜しみなく　北杜　菅原　光代
七五三身の丈ほどの千歳飴　甲府　橋田　泰昭

【評】新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。秀作の夢見さん、大年とは大晦日のこと。舟のたてる波に夕暮れの光がひと筋尾を引いています。一年が終わろうとする最後の夕暮れです。ひと筋の水尾に一年のさまざまな思いが籠められています。喜びも怒りも、そして悲しみも。佳作の中村さん、冬は神楽の季節、翁の面は、白髪の長い眉毛が垂れて天下泰平を祈る神聖な役割を担います。長寿を表す翁の面を冬晴れの暖かい日差しが包みます。能や神楽の舞台を思いました。小沢さん、山眠るは冬の季語、明るい晴天の日、はるか上空を風が過ぎ、冬の日が降り注ぐ下にどっしりと山が坐っているのでしょう。冬枯れの山の存在感が伝わってきます。金子さん、木枯は、木を吹き散らす初冬の北西からの風。八ケ岳と甲斐駒ケ岳の裾の交わるあたり、道が信州へ向かって延びています。北巨摩地方から信州へかけての地勢を思わせる情景です。

保坂 敏子選

◎こぼれてはまた満つひかり枯尾花　北杜　浅川　清
○卓袱台に新美南吉きつね鳴く　南アルプス　石川　恵
うすうすと日の届きたる藪柑子　南アルプス　深沢すみ江
午後の日の障子にうごく母の影　甲州　広瀬　博
煮ふくめる豆の匂ひや年暮るる　南アルプス　荻野　重美
掃き寄せて落葉の嵩の日の匂ひ　身延　深沢　幸枝
吊し柿揺れて日の暮れ早く来る　大月　米山　明博
ビロードのやうに炊き上ぐ今年米　南アルプス　井上　光子
名も知らぬ鳥近くゐる雪催　南アルプス　小池よし子
氏神に集ふ村人落葉焚く　市川三郷　三枝　稔
重さうに泰山木の枯葉かな　昭和　輿石さだ代
いつもゐる陽あたる場所へ初雀　山梨　菊嶋　幸信
山風のはげしくなりて霙降る　韮崎　仁科喜久男
賀状書く夫の遺せし住所録　南部　渡辺　和枝
父葬り母を葬りてひとりの冬　笛吹　田中　恒雄
電線の風にかたまる冬の鳥　笛吹　上矢　利代
静寂のちから満ちゆく冬木の芽　富士川　有泉　政弘
有明の月をとどめて枯木山　大月　小俣　義人

【評】第一句、尾花は芒のこと。花穂が動物の尾に似ているのでこう言うようです。秋の七草のひとつ尾花の金色の穂波はまさに秋を代表する風景ですが、蕭条と枯れ果てた冬野を象徴するものといったら、掲句の枯尾花もそのひとつでしょう。葉も穂も枯れ果ててなお身じろがず立っている尾花の群生。白く呆けた穂が冬の陽に輝いているのはそれはそれで息をのむ美しさに違いありません。青々と夏野を凌駕する芒や秋の陽に豊かに波打つ芒など時をかけた自然観照から生まれた「こぼれてはまた満つひかり」の感受。大切にしたい心の風景です。第二句、新美南吉は愛知県生まれの童話作家で僅か二十九歳で亡くなりましたが、「ごんぎつね」「おじいさんのランプ」「花のき村と盗人たち」など豊かな空想と土俗性の漂う作品を残しています。卓袱台の上には新美南吉の「ごんぎつね」。子どもたちはもう夢を見ているころでしょうか。遠くで狐が鳴くような静かな冬の夜。

川柳

浅川 和多留選

◎三年の日記とめざす米寿の日　甲斐　塚原　羊雲
○晩学へまだ緞帳は下ろせない　市川三郷　一瀬　文男
○涙ぐみ差し出す姑の免許証　中央　勝俣るり子
今日の顔張り替え見てる三面鏡　笛吹　永嶋之律子
風邪の熱これもまた良し休肝日　甲斐　中込　悟
幼子の初おみくじに神の笑み　昭和　深川しづ子
ほめ言葉上手に使い丸く行く　甲州　渡辺　冷子
ジイちゃんの顔が諭吉に見えてくる　甲府　代永　歌子
雪虫が天気予報を演舞する　市川三郷　笠井　文次
家計簿の赤と黒とが綱引きす　甲府　遠藤　征子
携帯を失くして分かる命綱　富士川　初鹿三紀男
同窓会古希の歳でもちゃんと君　南アルプス　大森　巌

【評】秀作、長寿社会の今、兎に角毎日を元気で過ごしたい、でも誰もがふと余命を考えるのも現実、そこで目標と希望を胸に三年日記に挑戦する羊雲さん、米寿を目指しその日をしっかりと掴みたい。正月に相応しい一句。佳一、人生に完成は無いので生涯学ぶことばかり、しかしいつの日か幕が下りることもまた当然のこと、でも今は人生という舞台で演技の真っ最中、まだ緞帳は下ろせないという感慨ぶかい一句。佳二、毎日のように高齢ドライバーの事故のニュース、車社会の中でアクセルとブレーキの踏み間違い、誰にもはっとした経験がある、あぶないよ、乗らないで、返納の決断に諸々感謝の涙かも。

玉島 よ志子選

◎新春の風穏やかに住む平和　市川三郷　望月　一成
○胸を張れ昭和を生きたわれら喜寿　南アルプス　高畑　次男
○帰省子の背中に田舎張り付ける　北杜　清水　保夫
国際化孫は中国ハネムーン　笛吹　深沢　敬
天変地異人の驕りを戒める　甲斐　秋山　松雄
スローライフ絵入り年賀に時をかけ　笛吹　吉村　家隆
めまぐるし休刊明けの社会面　南アルプス　大森　一男
東京も田舎も同じ陽が昇る　南アルプス　功刀きよ子
朝刊も折り込みチラシに押され気味　中央　村上　仁志
吹っ切って暁の空俺の視野　市川三郷　小林　弘史
憧れた美男美女でも年に負け　南アルプス　宮坂しず子
一人居へ笑顔優しく届く花　甲州　横瀬　秀治

【評】本年もよろしくお願いします。一句目、ご家族お揃いで新春を迎えられたことでしょう。この一年が穏やかで平和な明け暮れで過ごせるように祈りましょう。二句目、昭和の激動をのり越えてきた活力、この自負が原動力となり前向きに生きる姿が清々しく感じられます。三句目、ふる里を忘れるなよという親の願い。親としての思いが込められています。四句目、中国のみならず若い世代は前向きに外国へと翼を広げて出かけていきます。五句目、地球の温暖化や多発する地震など、確かに人間の暮らしへ警鐘を鳴らし戒めているようです。六句目、ゆったりと流れる刻の中で年賀状を書ける幸せ。

県立文学館 この逸品 21

夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』（大倉書店・服部書店）。右から上編、中編、下編

夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』（大倉書店・服部書店）

話題呼んだ美しい装丁

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」で始まる漱石最初の長編小説は、1905（明治38）年1月から06（明治39）年8月にかけて、雑誌「ホトトギス」に断続的に発表されました。中学校の英語教師に拾われた猫が、人間社会を風刺し滑稽かつ辛辣に批評する独創的な世界は、「ホトトギス」連載当初から高く評価され、この作品によって漱石は一躍人気作家となりました。

連載途中の05年10月に上編が発行され、発売日からわずか20日で初版を売り尽くしました。装丁は、漱石の依頼により橋口五葉が担当しました。菊版、天金、角背、アンカット、カバー付き。表紙やカバーのほか、中扉、奥付、背にもさまざまな猫の絵が描かれています。

それまでの日本にはない近代的な美しさと豪華さで大きな話題を呼び、厳しい評論で知られる小説家の内田魯庵も「其内容と云ひ外観と云ひ二つながら申分なき近来の佳著」（「學燈」明治38年10月号）と絶賛しています。（山梨県立文学館　飯沼典子）

＝次回は2月6日に掲載します。

短歌

三枝 昂之選

◎年の瀬に自分に宛てた年賀状健康果たす約束を記す　市川三郷　山口　正雄
○生きのびるただそれだけを杖にして戦後を生きた強き母なり　甲府　田辺　新造
○障子張り仕上げに「プー」と霧を吹く心身確かな白寿の姑は　笛吹　志村　美幸
○巡り来る年に一度の誕生日年齢と気概のギャップに笑ふ　笛吹　沢登清一郎
ナビの音何とかしての妻の声何ともならぬ我が読解力　北杜　中　哲夫
ベンチにて推理小説読み終えて探偵擬きに人眺めたり　南アルプス　大森　美樹
お蔵には妖怪住むと信じてたカタバミ覆う四角い跡地　中央　山田まさ枝
幼な日の「むすんで・ひらいて」甦る炬燵に義妹と脳トレ為せば　笛吹　野沢　梅子
年賀状今年も書いて暮れ迫る癖ある文字で音信となす　富士川　依田　茂
十年を超えた独りにまだ慣れず手抜きをしては辻褄合はす　甲府　宮坂　延雄
目覚めれば死に神近くにいる気配目をこらせれば姿は消えり　甲府　小泉　節子
丸まると一果に秋を閉ぢこめて柿はたわわに色誇るなり　笛吹　田中　恒雄
ふんわりと包みたき物多ければ霜月のうちに雪は降りたり　北杜　坂本千津子
手術せし妻を見守り夜遅く帰えりし道につつじが赤し　中央　功刀　一春
ひとまわり大きくなって御下りのベンチコートが様になってる　中央　小林真由美
蛇笏龍太息づく里の谷川も山廬といふも雪に埋もるる　甲府　渡辺　優
姉の形見羽織ればまたも思い出す苦しみながら逝きし姿を　富士吉田　渡辺のり子
本人はそんなに辛くないのだと言われながらも見てはいられず　身延　池田　茂光

【評】新年一回目だから年賀状の歌から。この主題は読みながら一人一人をなつかしむという内容がもっとも多い。年に一度の儀式として大切だろう。しかし山口さんは年頭の誓いを自分宛てに出す。かなり異色だが、文字にして届けると誓う気持ちがより強くなる。そこがユニーク。この歌から思い出したのは歌会始への毎年の出詠は両陛下への年賀状のつもり、というある女性の話。年賀状もいろいろである。田辺さんはもっとも困難な戦中戦後を生き抜いた母。今の百歳前後の世代だろうか。同じ時代を生きても父たちとは困難の質が違う。だから「強き母なり」という断定が生きる。志村さんは霧を吹く「プー」から昔ながらの障子張りが浮かんできて、折り目正しく生きる白寿の姿に脱帽。沢登さんは気概は変わらないのに身体が追い付かない。そんな様相を思わせて、歳を重ねた人ならではの自画像が共感を誘う。

今年もさまざまな試みを期待しています。

河野 小百合選

◎君の写真集めて作るガーランドひと月ふた月もうすぐ六月　南アルプス　望月　昭子
○文学館を囲むもみじのそれぞれにしっとりと露今日一葉忌　甲府　小野　卓
○防衛大臣のファッションめがねのあやしかり永らえし世のあやしかりけり　南アルプス　依田　邦恵
○部屋中の暖房器具を動かしてテレビ画面の初雪を観る　山梨　川井　洋二
どうだんの真紅の垣に蟷螂が合掌姿で終えていたり　西桂　田村深一郎
いつからか日課となったウォーキング二足歩行を続ける為に　山中湖　星野　喜雄
庭紅葉の色より赤き手作りのポスト置かれて良き便り来そう　笛吹　吉村ますみ
つがいにて飛ぶ鳥にさえやきもちす私の夫はその空の上　甲州　広瀬　由美
障りある膝を運びてブドウ園に箕にて撒きいる牛糞の音　笛吹　荻原　忠敬
山茶花の花それぞれが雪まというき足だちて今日は冬晴れ　甲斐　宮内　春枝
生きてさえいてくれたらと願いし日忘れていくつ妻への小言　笛吹　角田　好弘
小春日に育つを待ちて菜園のだいこん白菜声かけまわる　南アルプス　鈴木　洋子
どのように冬を過ごさん野鹿たち黒豆のような糞を残して　山梨　佐藤　由子
朝の陽が銀糸のレース透かすがの芒穂波のなかをあゆめり　甲府　内藤　勝人
若き日の同僚と道の駅に遭うかたみにその手にぎりあいたり　甲府　丸山さかえ
オレンジの軒に連なる百目柿不意に寄りくる秋の初雪　甲府　雨宮あさ子
カラオケに入れ歯外して唄う友昭和四年のラッパ隊長　甲州　広瀬　久夫
雪の日に仕事を終えてコラニーへユーミンの歌に守られたくて　甲州　麻生　孝

【評】新年明けましておめでとうございます。一首目、弾むようなリズムに、作者の心持が滲む。「ガーランド」は、壁や窓を装飾するために、花や葉などを繋げて網状にしたもの。ここでは「君の写真」を、ガーランドにしているのである。恐らく孫なのだろうが、「君」と言ったことで、客観性が加わった。その成長ぶりを「ひと月ふた月もうすぐ六月」と、畳み込むようなリズムで表現したことも魅力的である。孫歌は甘くなりがちだから、心情を直接のべるのではなく、この作品のように自分らしい物に託す工夫をしたい。二首目、文学館のもみじの情景を端的に切り取ったことがよく、結句の「一葉忌」へと、見事に転換させた。一葉の亡くなったのは十一月二十三日、偲ぶ心情が「しっとりと露」に、重ねられた。三首目、日本の将来への不安を「あやしかり」のリフレインで強調した。真珠湾での献花の翌日、稲田防衛大臣が靖国参拝をしたことも気がかりである。

閲覧室

◆**裸子12月号**　雑詠は「孫摘める秋の草花風に揺れ」村松哲也「投げ出してしばらく弾む稲架の竿」細川富士夫「山裾のローカル電車花芒」長瀬みち子などを掲載。（裸子発行所・800円）

◆**富士12月号**　作品は「吾にまとふ母の気配も消しゆかむ空へけむりを上ぐる送り火」武藤朱実「みどり萌ゆる宗谷丘陵黒牛の水場めざして一列に行く」村田三枝子「送り火を済ませて八畳広広と気付く虫の音今夜はひとり」室井睦美など。（富士短歌会・1000円）

◆**美知思波12月号**　十二月集は「塀越えて伸びたる枝に紅薔薇過ぎゆく夏の二輪ゆさゆさ」関戸公子「萎えたる脚かかへ地べたに座り込む球抱く畑に秋かげながく」川口久「夏の間を蝉すまはせし櫟の木今朝秀つ枝に鴉なきをり」祢津達子などを収載。（美知思波発行所・1000円）

◆**轍12月号**　表紙句は「国民の禊のように第九鳴る」山田勉。轍作品は「遺言書開封すると皆他人」手塚教子「裏表パソコンが書く年賀状」遠藤昇などを掲載。（轍発行所・1200円）

◆**甲斐野12月号**　甲斐野集新風の部は「終い風呂ピエロ演じた日の疲れ」佐野はな江、爽風の部は「甲斐野誌を開けば沁みる恩師の句」望月貴美子など。第1回東峰賞の結果を発表している。（川柳甲斐野社・800円）